

金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利さん



「夏の風物詩」に思い寄せて

各地で夏の高校野球地方大会が真っ盛り。夏の風物詩としてやはり一級品ですね。私は大阪出身なので甲子園は割切身近です。父の仕事の取引先が札幌にあり、北海道校が出場するとき、「応援よろしく」と入場券が送られてきます。それが夏休み中の子どもにも回ってきて、友達を誘って行くことになりました。

暑いさなか、おにぎりを持ち、名物カチワリ代と電車賃をもらって甲子園行き。応援団席のそばにいて、大声で声援を送るものだから、周りの人が、なぜ大阪弁の子らがここに居るのかと戸惑いながらも、可愛がってくれジュースやら何やらをくれます。

1960年は相当強くて、ベスト4の春に続き、夏もベスト8まで行きました。そうすると顔も覚えられ、いつぱしの応援団員気取りです。この頃に一生懸命見た記憶が濃いかからか、そこそこの年齢になるまで、高校野球Ⅱほとんど大人、というイメージが焼きついていました。

私の母校大阪府立市岡高校は、1901(明治34)年、旧制大阪府第七中学校として創立。市内の旧制中で3番目にできたので「三中」と呼ばれ、制帽の3本線が有名でした。

大阪勢が初めて甲子園に出場した16(大正5)年の第2回大会で準優勝。この頃から昭和初期にかけては強かったのですが、その後はご存じの通り浪華商、明星、近大付、PL学園、大阪桐蔭などの私立強豪が台頭し、ほとんど見なくなりました。95年の選抜が最後で、帽子の3本線が話題になったぐらいです。

1968年、朝日新聞の大阪大会の特集表紙は、我が校で撮影されました。それほど市岡では野球が特別だったのです。私はバスケットボール部で、67年にインターハイに出ることになり、皆で手分けして卒業生のいる法人を回り寄付をお願いしたことがあります。

ます。しかし、ほとんどが「野球やったらナンボでも出したんのになあ」とのつれない返事で、心底恨めしく思っただけです。

卒業生は、野球部は高野連元会長佐伯達夫、朝日新聞社元社長広岡知男、元巨人南村楨広、元南海蔭山和夫。文系は、直木賞の直木三十五、詩人三好達治、脚本家ジエームス三木、芥川賞作家の柴崎友香など錚々たる陣容です。

古い資料を見ると24年に北海道と市岡中が対戦している、8対5で市岡の勝利。もしそのときに私がいたら、どちらの応援席に座ったでしょう。手に汗握って、泥にまみれたお兄ちゃんらのプレーをまぶしそうに眺めていたに違いありません。

今年100回記念、一層の熱戦を期待したいですね。